

# 被災者に対する広域的な支援 におけるボランティアの役割

2012.12.14

CODE海外災害援助市民センター  
理事・事務局長 村井 雅清

# 世銀・IMFの総会が仙台で開かれ、「開発に防災の観点を」と確認される

(12・10・11 朝日新聞)

## 仙台声明骨子

- いかなる国や地域も自然災害から完全に逃れることはできない
- 中央政府と開発援助機関に対し、防災を軸に開発援助の努力を加速するよう求める
- 災害に強い社会を構築するための防災投資は、人命を救い、復興費用を最小化する
- 日本に蓄積されたノウハウや専門性を途上国に活用し、技術的、財政的支援を強化

# 「開発に防災の観点を」

## IMF・世銀総会 仙台会合で宣言

国際通貨基金(IMF)・

世界銀行年次総会の一環として仙台市で開かれた「防災と開発に関する会合」が10日、閉幕した。東日本大震災の教訓を世界各地で生かすため、「開発のあらゆる側面で防災の観点を取り入れることが喫緊の課題だ」とする「仙台宣言」を

まとめた。

▼3面||異例の中国欠席、9面||途上国には難題

宣言では、想定を超える津波が甚大な被害を引き起こしたことに触れ、日本のように防災文化を築いてきた国でも災害のリスクにさらされていると指摘した。また、「大規模な自然災害

が起きれば、長く開発してきた成果が一瞬で損なわれる」とも強調した。

そのうえで「災害に強い社会を構築するための投資が必要」と訴え、とくに「災害に弱い途上国への技術支援、財政的な支援」を世界各国に求めた。

(松浦祐子)

# 人間には「恢復力」がある

## 世界P・E・Nフォーラム 吉岡 忍

地震や台風や噴火と、小説や音楽や絵画。おまじゆ物と風わられてきた災害と文化を一つのステージ上で出合わせたい、とわたしはたからんた。それも国際的な規模で。

二月二十二日から四日間、わたしもその一員である日本ペンクラブは、東京・新宿のスペースゼロで世界P・E・Nフォーラム「災害と文化」を主催し、インドネシアやタイを主催した。インドネシアやタイが被災した。中国の千ばつや洪水、サモアの豪雨、アメリカのハリケーン、日本火山噴火や地震など、さまざまな被災体験を持つた小説家、映画監督、ミュージシャンがはせ巻して、くれた。

大江健三郎は少年期の台風の経験や近未来の東京直下型地震の怯えを語りながら、なお悲愴的に楽観的であることとする決意を語った。井上ひさしは原爆と台風に見舞われたヒロシマを舞台に朗読劇を書き下ろし、人為と自然の双方の災害の中で演出する熱力と言葉の尊厳を静かに繰り返した。

中国の作家、莫言があらゆる共同体の根柢にある、災害と人間が渾然一体となったドラマを

## 生きなおす力に

フォーラム最終日には参加者によるトークセッションも行われた  
＝東京・新宿のスペースゼロ



よしおか・しのぶ 1948年長野県生まれ。早大中退。教育、技術、社会問題など幅広い分野でルポルタージュを執筆。著書に講談社ノンフィクション賞を受賞した「墜落の夏」、「日本人ごっこ」、小説「月のナイフ」など。



## 災害は人を成熟させる

死んだ悪魔の生涯を描きながら、灰いじしの文明に光を当てた。浅間山噴火の消えた村の被災者の怒りを歌った。再生を告げた松本和幸、新潟の被災者で働いた目を静と歌に託した新井潤、かきさんの災害があるからそれわれは自然を再発見するのだと語った高田宗。黒田香子、藤野樹が選んだ俳句と短歌が、それを観て呼ぶ。ハリケーンを生きた瞬間を、たすーサンとスは生きた瞬間を失った悔いを歌い、アイビツド&ロゼリは打ち壊された被災者の怒りを歌った。小説の朗読のまてに、わたしは生演奏と映像を組み合わせた。これまでもわたしが世界各地で見た被災地は、それ自体が異様な体験する場だった。働いていた人々は歌うことを通じて、自分を取り戻し、生きなおす機会をつかんでいた。その全体的なプロセスをステージに持ち込みたいと考え、だからである。

語りださん(演目の一つ)が指し示していたことがあった。それは、被災者は無力かわいそうな弱者でもなく、現場の当事者であり、主体なのだ、という確信だった。強権による災害救済体制の必要を言いつつ、被災者は少ないが、被災者への敬意と信頼がなければ、そんなものは何の役にも立たない、と語る表現者たちの言葉に、わたしは唖然とすいていた。苦しみが人を成熟させ、その人を人生と世の中の当事者として、生きなおさせる。だが、思えばそれは、習志の日常生にも通底する真理である。四日間のフォーラムが明らかにしたことは、いつどこでも同じである。この真実にはかならない。(ノンフィクション作家)

(08・3・11 神戸新聞)

1985年のメキシコ地震で、「メキシコの奇跡」と言われた。世界から、2万人の支援者が来た。

1985.9.15 M8.0

震源地はメキシコシティ西350kmの河口沖  
メキシコシティでの長期振動による被害が注目された。

死亡者…約1万人(メキシコ政府公式発表)

倒壊(全壊)した建物…約3万棟、  
半壊した建物…約6万8千棟

クワテモックとの出会い  
(1996年のハビタットⅡ)



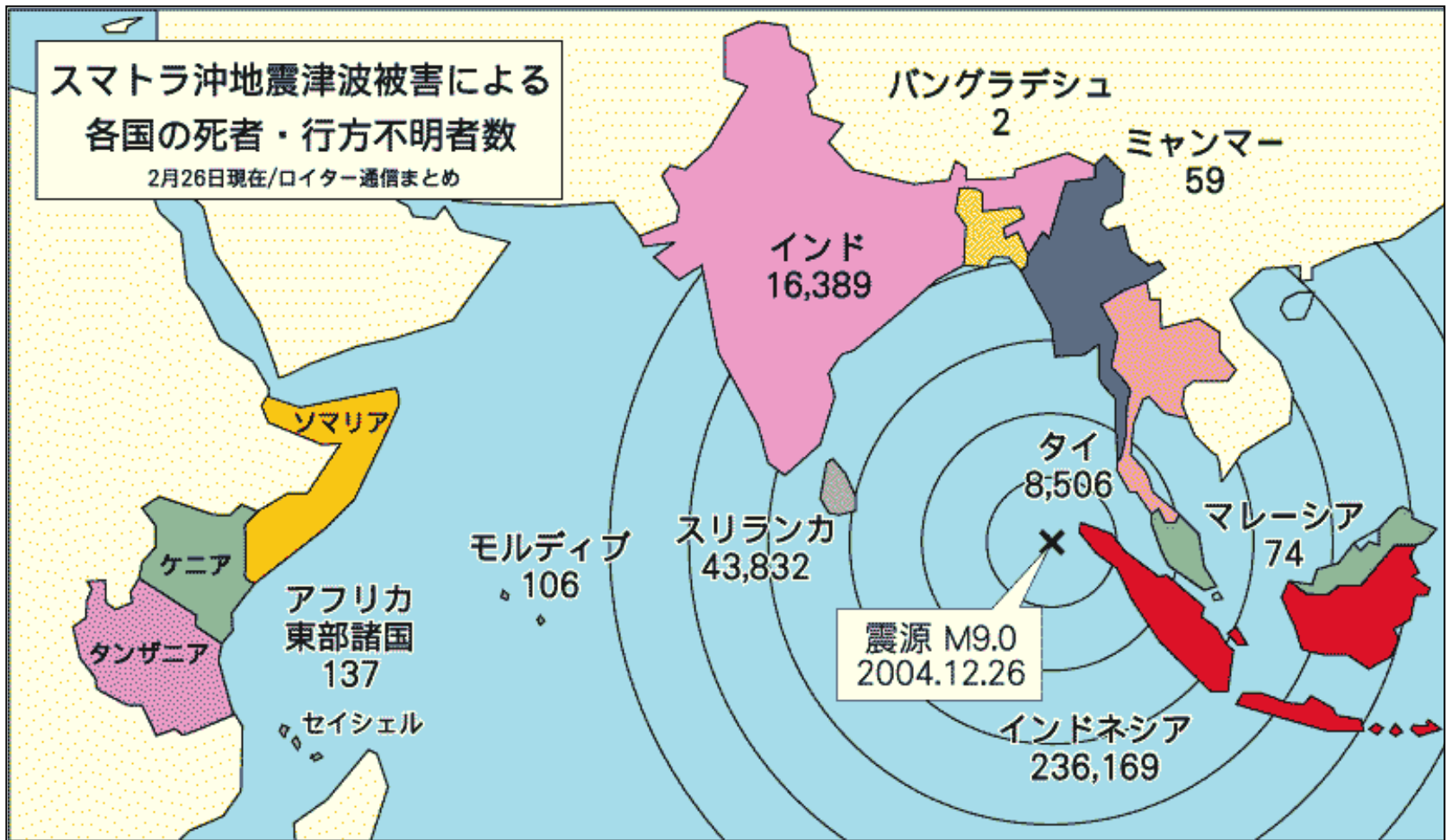
地震で倒壊したメキシコシティのアパート

# 2004年のスマトラ島沖地震津波で、13カ国が被害を受けた。世界中の支援が動いた。

2004.12.26 M9.1

震源地はバンダ・アチェ南南東沖

22万人以上が死亡、500万人が被災者となった。





# <スリランカ> 防災共育



「稲村の火」の読み聞かせ

避難所（お寺）の見学と写生





防災マップの作成



防災ソング







# スマトラ沖地震 モルディブから帰国



近藤ひろ子教諭

## 美浜町布土小 近藤ひろ子教諭

国際協力機構（JICA）の防災教育調査団の一員としてスマトラ沖地震津波の被災国、モルディブに派遣されていた美浜町布土小学校教諭の近藤ひろ子さん（53）が帰国した。地震津波から七カ月余りたつが、被災者の心に深く残る傷などに触れ「教育に携わる者、また人間として多くのことを教えられた」と活動を振り返った。

（下条 秀和）

近藤さんは、布土小での地震防災教育の指導実績が評価されて調査団に加わり、子どもらに対する防災教育を任せられた。

先月二十二二十九日の日程で訪問。モルディブ南部のフォナドール島の学校などで布土小の取り組みを紹介しながら防災意識を啓発した。

同島は約二千人が暮らして、津波で四人が死亡した。島を歩くと、家の外壁のブロックが散乱するなどあちこちに惨状が残っていた。学校関係者との事前打ち合わせなどでは「津波は怖い」という声が盛んに聞かれ、「対策の方法がまだ見えていない」と実感した。

# 防災意識 学校から発信を



モルディブの子どもたちに防災教育を行う美浜町布土小学校の近藤教諭室＝モルディブで（近藤教諭提供）

## 助け合いの心伝えた

布土小での地域を巻き込んだ活動成果を踏まえ、島の子どもや教員たち、島の子どもや教員たち、婦人会の集まりで、防災の根底にある助け合いの大切さなどを強調。津波対策を考えるグループ単位の意見発表した」と話した。

「防災意識が学校が発信基地となって島中に広がっていけば」と近藤さんは願う。自身の今後の教員生活を見据え「防災教育を通して自分と同様に他人の命も大切にすることを、子どもたちに伝えたい」と話した。

（2005.8.6 中日新聞）

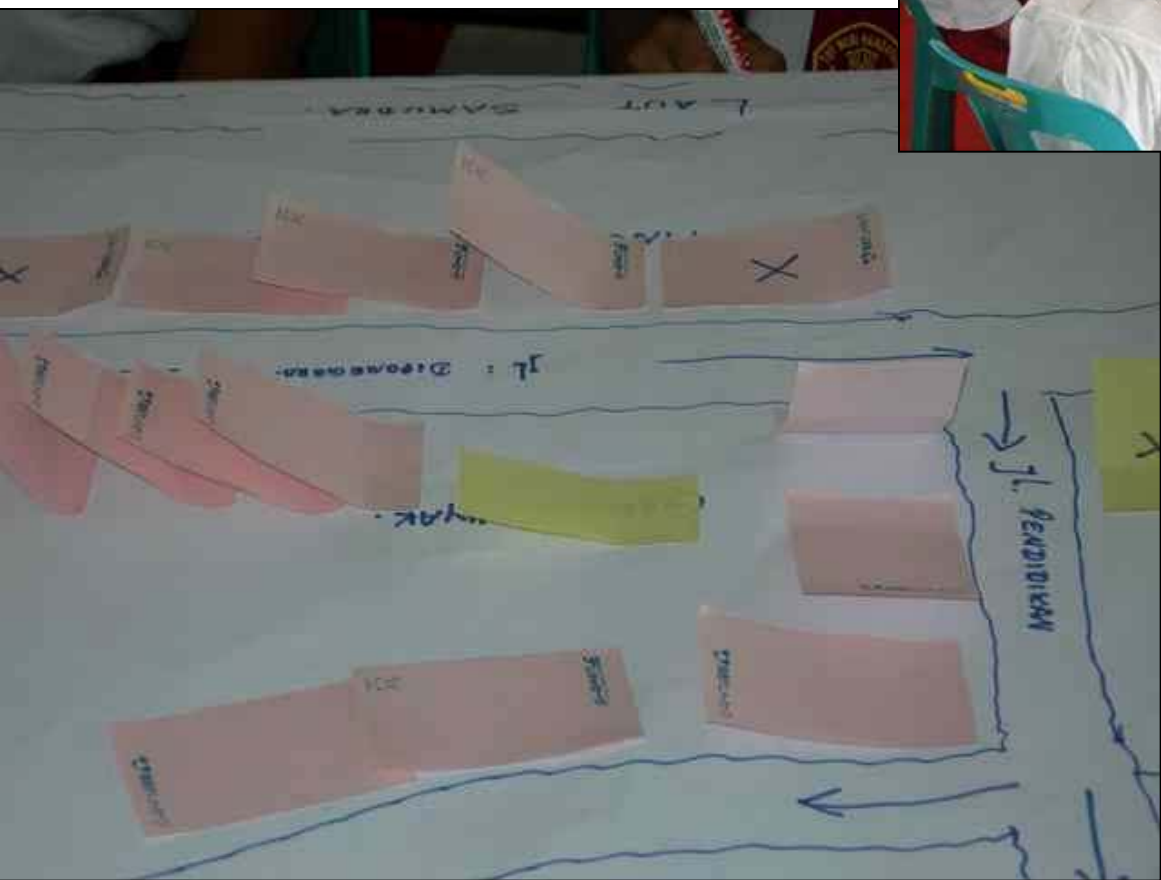




<インドネシア・ニアス島>  
(2004・3・21)  
・防災ソングの練習



# ・ワークショップで図上訓練 (ニアス島)



# 3.11東日本大震災で世界の252カ国から支援

## インドネシア

- 援助隊11人、事務員・メディカル4人
- 200万ドル(約1億6,000万円)表明
- 毛布

2004年に発生したスマトラ沖大地震・インド洋津波災害の最大被災地バンダ・アチユ市では、東日本大震災を受けて追悼行事が行われ、「最大の援助国だった日本を、今度は私たちが助けたい」というメッセージが読み上げられた。「僕たちも同じように被災した仲間だから悲しくないで頑張ろう」という励ましの言葉も届けられている。



## カンボジア

● 10万ドル表明(約800万円)

● 全国各地から首都プノンペンに日本大使館に市問者があり、「カンボジアのために多くの支援をしてくれたことに感謝しています。日本の被害に心を痛めており、わずかばかりの寄付ですが、被災者の役に立ててください」といったメッセージが届けられた。



## パレスチナ自治区

● JICA留学研修員の呼びかけにより、戦禍にあるガザ地区で開かれた追悼集会。パレスチナ難民キャンプで避難生活を送る子どもたちからも、「以前、青年海外協力隊員から「顔で笑って、心で泣く」というサムライの精神を学びました。時間がきつと少しづつ傷を癒してくれるでしょう」というメッセージが届けられた。



## ケニア

● 「[ソウ]は与えられた牙を支える力がある」とケニアのことわざにある通り、日本の皆さんはきっとこの困難を乗り越えられるはず。なぜならその力を神様に与えられているからです。明るい未来があります。絶対にあきらめないで。日本が支援してきたケニア大学日本語学科の生徒が日本語でスピーチ。その後、生徒全員で「上を向いて歩こう」を合唱した。



## パキスタン

● 水、牛乳、高カロリービスケット

● 2005年のパキスタン北部地震で被災した地元NGOが「日本は常にパキスタンを助けてくれた。すべてのパキスタン人がこの悲しみを共有している」と激励。また、その地震で倒壊した校舎が日本の支援で再建されたことに對し、カシミール地方の女子高校生が「日本との連帯」の気持ちを表したいと横断幕を掲げた。



# 日本に届いた 252の心

— 今度は私たちの番 —

2011年 3月11日、ニチュード9.0の地震が、波を引き起こし、**東北地方を中心にとくさんの人戦後最悪の災害で日本中が悲しみに暮れる中、届けられたのが、**  
● **世界252の国・地域・国**  
● **そして連帯や信頼の思い。**  
● **日本がODAで支援したくさんの“心”**  
● **世界のみなさん、**



## フィリピン

- 日本の国家試験に合格した3人の看護師含むボランティアチーム(予定)
- 食料品パック、カップめん、パスタ、マット、防護マスク
- 2006年に大規模な地滑りで1,000人以上の死者・行方不明者を出したセントベルナルド町。「被災当時に日本から支援を受けた我々が、今度は兄弟である日本にお返しをしたい。1ペソ、5ペソ硬貨でもいい。額は少ないかもしれないが、日本への気持ちを表したい」と募金活動が行われた。



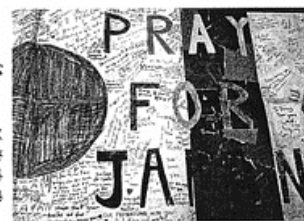
## コスタリカ

● 日本が支援する小学校の児童が被災地の子どもたちを思い、「コスタリカにも友達がいることを知って元気になってほしい」といったメッセージを送った。「世界の手本であり、愛する日本の危機に少しでも協力したい」という市民からの声も寄せられている。

Costa Rica

## セントビンセント及びグレナディーン諸島

● 「神のご加護がありますように」「早く復興が実現しますように」「日本の皆さんのために祈っています」。青年海外協力隊が活動するカリブ海の小さな島国から届けられた温かいメッセージ。



## チリ

● 日本が支援してきた津波防災教育の教材が完成し、昨年のチリ大地震の最大被災地に配布されたのが3月11日。奇しくもこの日に戦後最悪の震災に見舞われた日本だったが、まさにその時「チリの防災意識を高める事業に日本が貢献していた」と感謝の念が現地でも広がっている。



# 1995年の阪神淡路大震災で 70以上の国から支援を受けた

ビスケット、毛布、紅茶

ベニヤ板

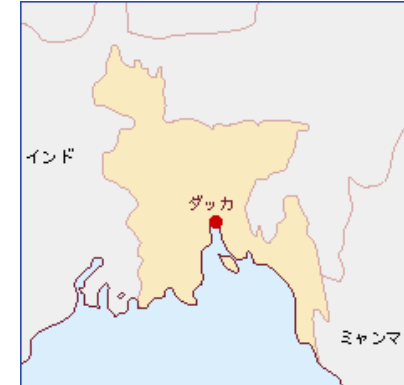
紅茶

紅茶

毛布、スナック  
防寒着

医療チーム、毛布  
スナック

毛布、スナック防  
寒着



「痛みの共有」から「困った時はお互い様」

海外災害援助市民センター

Citizen toward

Overseas

Disaster

Emergency

**CODE**

Citizens towards Overseas Disaster Emergency

# 被災市民によるKOBE発の救援活動



1985年のメキシコ地震で、「メキシコの奇跡」と言われた。世界から、2万人の支援者が来た。

1985.9.15 M8.0

震源地はメキシコシティ西350kmの河口沖  
メキシコシティでの長期振動による被害が注目された。

死亡者…約1万人(メキシコ政府公式発表)

倒壊(全壊)した建物…約3万棟、  
半壊した建物…約6万8千棟

クワテモックとの出会い  
(1996年のハビタットⅡ)



地震で倒壊したメキシコシティのアパート




## 長い目で 復興を支援

KOBEの経験を活かし、市民と協働して、海外の被災地の生活再建・復興を支援します。復興には長い時間がかかります。CODEは中・長期的な視点で被災地に寄り添います。

## 現地の 内発性を尊重

災害救援においては、被災地の人々が持続可能な暮らしを立て直すための“内発性を育む”ことが必須です。被災地の人々自身が描き・担う、現地の文化や慣習を反映した復興計画や行動計画づくりを支援します。

## CODEのこころ



KOBEから世界へ  
学びあい・  
支えあいの連鎖を

## 支援の 届きにくい人へ

弱い立場の人が、被災によってより不利な立場に置かれ続けられないよう、「痛みの共有」の精神から、子ども、女性、障害者、高齢者、外国人、マイノリティなどへの支援活動を重視します。

## 最後の ひとりまで

災害救援は、最後のひとりの人権を回復するまで、直接的に、間接的にかわることが求められます。「被災者」と一括りにするのではなく、多様な一人ひとりを尊重し、たったひとり、最後のひとりの声にも耳を傾けます。

## CODEの目指すもの



### きずなによる「地球市民力」の向上

国と国とが繋がれない場合でも、人と人とはいつでもつながることができます。災害を機に各地との交流が続いているように、それぞれに慣習や文化の違いがあることを認めつつ、自然災害に対する共通言語を見いだし支えあっていく。CODEは、そのきずなが「地球市民力」の向上に、そして世界の平和につながると確信しています。



### 持続可能で回復力のある社会

防災・減災に取り組むには、地域のコミュニティとくらし、自然環境について考えることが欠かせません。従来の価値観によらない「もうひとつの社会」、つまり地域の自立や自然との共生を目指す持続可能なコミュニティづくりを提案します。これが、事前の備えと災害からの回復力を高めることにつながります。

# CODEの復興支援プロジェクトの例

- 幼稚園、小学校、地域のコミュニティセンター、障害者のケア施設などの建設
- 伝統建築などの建設・再建
- 耐震技術の伝達
- 住宅再建の資材提供
- 漁業組合への船の提供
- 防災教育(防災共育)
- 女性向け職業訓練センター建設
- 生計再建のためのマイクロクレジット
- 復興のための政策提言



# ホンジュラス

1998.12.

ハリケーン“ミッチ”



住民の自立支援  
(住宅資材の配布)

# トルコ共和国

1999.8.17

Magnitude 7.4



・青空ミーティング

・市民文化センター





## 開所式

子どもによる  
子どものための

# トルコ “愛と望みのテント”

ビンギョル地震(2003.5.1)への支援  
\* 市民文化センターを拠点に





# 中華民国(台湾)

1999.9.21  
マグニチュード 7.7



潭南村プノン族  
コミュニティ支援

**パキスタン**  
**2005.10.8**  
**Magnitude7.6**





女性の生活向上  
支援のための  
職業訓練センター建設  
(\* 徹底した討論の中  
から結論を見いだす。)





# インドネシア・ジャワ島

2006.5.27

Magnitude 6.2





# 「ゴトンロヨン」(相互扶助)と 地域資源を活かした 伝統工法の耐震住宅

## 建築家エコさんとの 「エコ・プロジェクト」





# 中国四川省 2008.5.12





被災者の「つぶやき」を聞く

家はみんなで作てるもの。



# 老年活動センターの建設 2011年6月着工







# アフガニスタン

ぶどうプロジェクト  
(2003.5～)

地域経済の再建







## 畑の再建と収穫



# カレーズ (地下水路)





# ぶどうファミリー 288→519世帯

**ぶどう基金 (2012.3.31現在)**

**総額 16,541,431円**

**オーナー数 延2,305人**



# 山梨県でぶどう農園実習(2007年～2009年)



2010年

研修の成果をフィードバック  
ク→ミールバチャコット

“品種に勝る技術なし”



ハイチ  
2010.1.12  
Magnitude 7.0





## メキシコ人スタッフ クワウテモック氏を派遣



モバイル・クリニック



孤児院訪問

# 被災者団体ACISISの マイクロファイナンスプログラムをサポート。 被災した女性の起業・事業再建を支援

\*ハイチの民間経済の根幹である  
“露天商”への参画をサポート





# ハイチ



農業技術学校のイメージ(GEDDH作成)

## ●農業技術学校の建設

## ●集会所の運営支援 ●孤児への支援

2010年1月の地震以来、CODEは支援を続けてきました。2012年9月からは、9割以上の建物が壊れるなどした被災地レオガンにおいて、現地NGO「GEDDH」と農業技術学校の建設を進めています。GEDDHは2005年から地元で農業と植林に取り組んできました。農業はハイチの主な生活基盤であり、植林は毎年来るハリケーンなどの防災においても重要です。

また、首都ポルトープランスで「日本ハイチ協会」が運営する拠点をサポートし、地域のつながりづくりと支援機関のネットワークに貢献しています。その他、孤児の支援に向けた情報収集・連携も進めています。

# 青海省地震 概要

**日時** : 2010年4月14日 7時48分(現地時間)

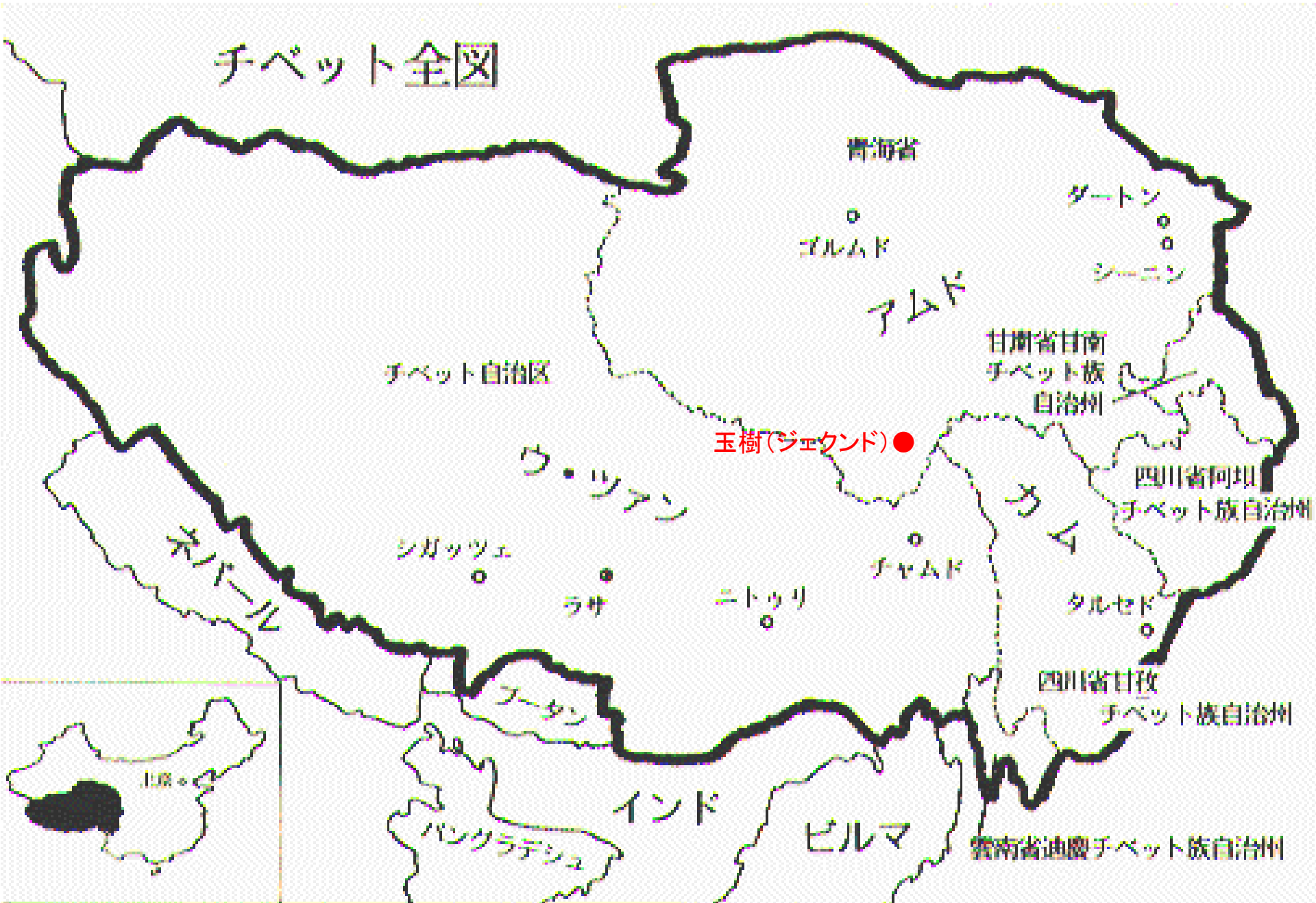
**規模** : M7.1

**震源** : 玉樹州結古鎮の北西約30Km

**深さ** : 約33km

**被災地** : 青海省玉樹チベット自治州結古鎮  
(922m<sup>2</sup>)とその周辺、四川省カンゼ州

# チベット文化圏



# YAK (ヤク)

生産と消費



暮らし



信仰



収入



# ボランティア元年

日本全国から最大で1日20,000人のボランティアが駆けつけ、その数は1年間で延べ1,380,000人にのぼった(2ヶ月で100万人を超えた)。100万人の内、初心者が60%~70%も占めた。



# 多彩な活動がその後の公益活動の担い手になる。

- 介護、看護、病院送迎、心のケア
- 引っ越し手伝い、イベント開催
- 何でも相談、お茶会、話し相手（足湯ボランティア）
- 入浴サービス、家事手伝い、買い物代行、バザー
- 学習サポート、子どものサポート、託児代行、
- DV被災者支援
- 避難所やテント生活のサポート、洗濯ボランティア
- 炊き出し（鍋釜作戦）
- 個別のニーズ対応（アトピー食、糖尿病食）
- 大工ボランティア、避難所から地域再建（魚崎地区）
- 自然環境保護運動、ペット救済活動
- 災害時最優先配慮者のサポート
- 読経ボランティア

世界人権宣言の「すべて人は平等」



一人ひとりに寄り添う



最後の一人まで救う



すべての人は平等に

阪神・淡路大震災は、価値観の大転換をもたらした。

# ボランティア 1桁止まり

## 盛岡市開設、宮古の派遣施設

東日本大震災で被災した宮古市、岩手県山田、大槌町などにボランティアを派遣するため、盛岡市が宮古市に開設した「かわいいキャンプ」が、志願者不足に悩んでいる。ボランティアの需要は1日20～30人あるのに対して、志願者が10人に満たない日もある。年末にかけて派遣要請は現状のまま続くともみられ、関係者はPRに躍起になっている。

キャンプを運営する市社会福祉協議会によると、ピークの昨年8月は1日平均55人のボランティアを受け入れた。その後は徐々に減り、今月中旬は10人以下にまで減少した。

理由として、市社協は①県外に被災地の情報が十分行き渡らず、手助けが必要なくなったと思われる②福島第1原発事故の避難区域の再編で立ち入れるようになった福島県の一部地区に志願者が集まっている―などを挙げる。

被災者からの派遣要請は畑の整地、草刈り、側溝の泥かき、引っ越し手伝い、イベント支援など。ボランティアが足りないため、支援活動を隔日から週1日に減らした例も出ている。

## 需要20～30人 参加呼び掛け

市社協は募集チラシを県内の大学などに配布したほか、ボランティアの経験者に電子メールで参加を呼び掛けている。2005。

中塚英慈主任は「人手不足を知って、滞在期間を延長するボランティアもいる。被災地を忘れないために、意欲ある人はぜひ来てほしい」と話す。

かわいいキャンプは盛岡市が昨年7月に開設。ボランティアは改装した旧学校校舎に無料で宿泊し、午前8時から午後5時ごろまで活動する。日帰りでの参加も可能。連絡先は0193(76)2005。



草刈りに汗を流すボランティア●岩手県大槌町大槌



## 基調講演

宮城県知事 村井嘉浩さん



宮城県は1978年に県内で起きた地震をもとにマグニチュード8.0の地震を想定していた。ところが実際には9.0の地震がきた。

津波は想定10層に対し、高さ15層の防災庁舎がのみ込まれた。全壊家屋数や死者、避難者など全てが想定を超え、行政の力だけでは震災対応

## 来てもらおうと励ましに

は不可能だった。

当初、大量のボランティアへの対応を恐れていたが、杞憂に終わった。県内のボランティアは今年9月までの累計で54万人。今回は「ボランティアのためのボランティア」が機能した。例えば、被災地に向かう高速道路のパーキングエリアに設けられたボランティア用の「インフォメーションセンター」が好例だ。

企業からは被災地全体で約18万人がボランティアに参加してくれた。漁船や冷凍冷蔵施設など事業再開に向けた設備の提供まであった。被災地では震災で11万人の雇用が失われたが、11社が県内に進出し、約600人を雇用してくれた。

がれきが撤去され、インフラの復旧は着実に進んでいるが、被災地の復興はまだ緒に就いたばかり。復興に向けた東北を見に来てもらうことが、何よりの励ましになる。



# 東北・関東大震災

2011年3月11日(金) 14:46

## M9.0

# 巨大災害 広域災害 複合災害

### <大震災被災者>

死者 1万5873人

不明者 2744人

(2012年11月14日現在、警察庁まとめ)

関連死 2302人 (9月30日現在)

避難 32万4858人

県外への避難 6万8409人

(2012年11月1日現在、復興庁まとめ)

### 被災者数 (15日現在、警察庁まとめ)

	死亡	行方不明	避難
全国合計	13,591	14,497	138,212
主な都道府県			
北海道	1		955
青森県	3	1	887
岩手県	3,924	4,031	44,328
宮城県	8,304	7,918	46,541
秋田県			539
山形県	2		1,705
福島県	1,300	2,544	24,809
茨城県	23	1	731
栃木県	4		1,009
群馬県	1		2,864
埼玉県	18	2	3,581
千葉県	18	2	1,168
東京都	7		929
神奈川県	4		690
新潟県			4,859



# 遠野にボランティヤ村

## 岩手 宿泊拠点 144施設開放へ

岩手県遠野市は市内の集会所などの施設1

44カ所(約2200

人が宿泊可能)を、三

陸沿岸部を支援するボ

ランティヤの宿泊拠点

として開放することを

決めた。本田敏秋市長

が毎日新聞の取材に明

らかにした。沿岸部は

被害が大きく受け入れ

が難しかったが、「ボ

ランティヤ村」誕生で

被災地にアクセスしや

すくなり、長期支援が  
可能になりそうだ。

遠野市は内陸にあ

り、壊滅的な被害を受

けた大槌町や陸前高田

市などの沿岸部に車で

約1時間で行ける。

施設は10〜100畳

程度で、ほとんどが電

気設備やトイレ、炊事

場などを備えている。

風呂は市内に2カ所あ

る市営入浴施設を利用

できる。電気料金など

のため市は、1グルー

プあたり1泊2000

円程度を求める予定

だ。本田市長は「今後は

非常に大きなマンパワ

ーが必要になる。長期

的に拠点を提供し被災

地を後方支援したい」

と話す。【山田泰蔵】

機械にはさまれ

男性社員が死亡

東大阪の加工会社

19日午前7時50分ご

# NPOの事例：山形県米沢市民の後方支援



## 3.11以後も 生きるヒント

普段着の市民による「支縁の思考」

三好亜矢子・生江明 編

「互いを必要とし合う人々」になろう!

東日本大震災の支援の現場から、私たちが一番伝えたかったこと。

新評論

平成24年(2012年)1月26日(木曜日)  
(第三種郵便物認可) 山形 朝日 米沢

### 被災3県に支援物資提供 米沢への避難者サポート

## ボランティア山形両面作戦

東日本大震災の被災者や福島県1原発事故の避難者を支えようと米沢市で結ばれた「ボランティア山形」が精力的な活動を続けている。岩手、宮城、福島の被災3県への支援を続けながら、米沢に約4000人いる福島からの避難者を支える両面作戦を展開。米沢市民や阪神大震災で培った県外の人脈に支えられ、被災者、避難者の間でも存在感を高めている。

ボランティア山形は1の柱一つ。同生協の生協生活クラブや米沢市に結ばれた「ボランティア山形」が精力的な活動を続けている。岩手、宮城、福島の被災3県への支援を続けながら、米沢に約4000人いる福島からの避難者を支える両面作戦を展開。米沢市民や阪神大震災で培った県外の人脈に支えられ、被災者、避難者の間でも存在感を高めている。

「阪神」契機に発足 人脈生きる  
県外の仲間も集結

1回開くなく、避難者の米沢暮らしをその手この手でサポートしている。同生協特別顧問でボランティア山形の代表を務める井上肇さん(58)は「たくさん米沢市民が、多様な形で支援に携わってくれている」と、市民の協力を語る。

生協生活クラブのネットワークの押しで被災地に支援物資を送り続けるほか、被災地の農産物を買い支える取り組みも展開。岩手へ被災者支援に当たる「被災者ネット」の運営などを担い、米沢は被災地支援の一大拠点となっている。市民ともに、大きな戦力になっているのが、阪神大震災で全国にボランティア脈を築いた井上肇さん(58)もその一人。横濱市に家族を置いて昨年3月

16日から米沢に押し、きた多くの仲間たちだ。副代表として活動を支えている。「米沢の皆さんへの感謝、ボランティア経験、恩返し」の気持ちで日々を送っている。被災者や避難者の方々に寄り添って、家族を置いて昨年3月

福島の避難者を支えようと開いている「10円バザー」毎回多くの来場者でにぎわっている。

# 被災地NGO協働センターからスタッフを派遣！！

**緊急 被災地に届けよう。**  
東北地方太平洋沖地震支援基金への  
ご協力をお願いします。

## 日本財団 ROADプロジェクト

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震  
「今出来ること」という一人ひとりの小さな道が一緒になって大きな道へ  
どんな困難も乗り越える力 ~ Resilience will Overcome Any Disaster.

【募集】足巻ボランティア 第5～8陣 (2011.05.01～現在)

第5～8陣についてはそれぞれ定員に達したため申込みの締め切りました。  
お申し込みがまだご希望の方は、次回募集は別途募集、こちらのROADプロジェクトブログでご案内します。

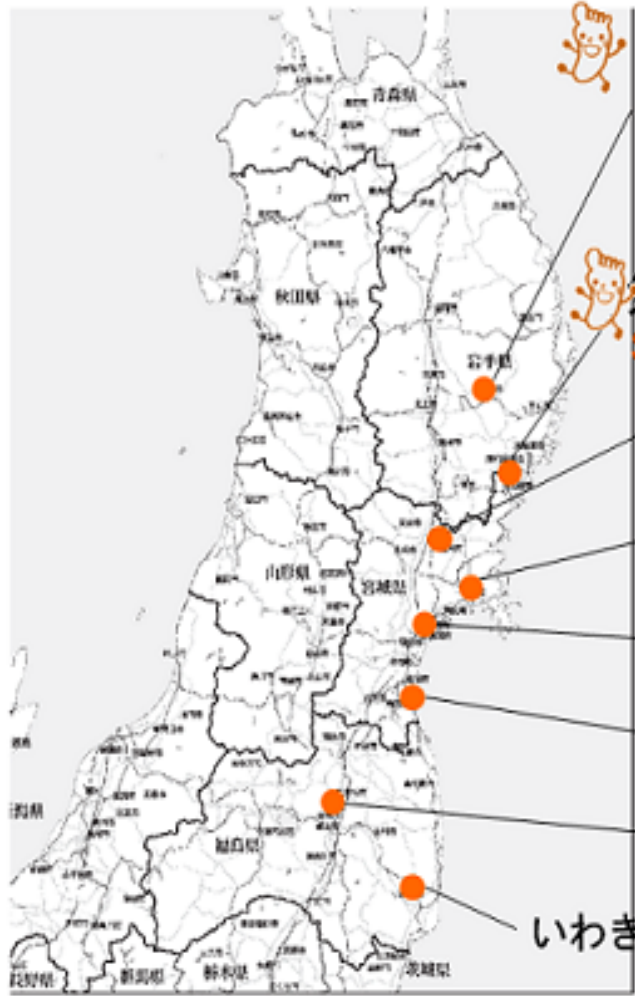
### ROADプロジェクト 足巻ボランティア【第5～8陣】 参加者募集中

2月1日からは各地で「足巻ボランティア」  
活動、第5～8陣の募集を行います。  
お申し込みください。

第1陣の足巻ボランティアの様子  
**こちら**



被災地では物資や電氣、ガスがなかなか回復のペースが遅い場合があります。被災地へは被災者のために



**遠野市→陸前高田・大船渡・大槌・釜石**  
静岡県ボランティア協会  
被災地NGO協働センター  
アレルギー支援ネットワーク

**気仙沼市**  
SVA・とちぎVネット

**登米市→南三陸町**  
東京災害ボランティアネットワーク

**石巻市日本財団**

**七ヶ浜町**  
レスキューストックヤード

**山元町ADRA**

**郡山市・福島市 チーム中越**  
ハートネットふくしま

**いわき市 茨城NPOセンター commons**



## 第7回 静岡県内外の災害ボランティアによる 救援活動のための図上訓練

### 開催のご案内

※宿泊は定員になりました。

「再び - 語り出す・学ぶ・つくる・決める・つながる・育む -」

私たちは、平常時から静岡県内外の災害ボランティアと関係者が信頼関係の構築と情報交換を行い、災害時には顔の見える関係者が互いに協力しながら救援活動を迅速に進めていく広域支援の仕組みを考える場として、「静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」を行ってきました。そのような中で発生した東日本大震災は決して人ごとではなく、災害時に備えた取り組みを続けてきた私たちに、さらに大きな課題を突き付けるものでもありました。亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、厳しい復興への道のりを歩んでいくお一人おひとりの気持ちに寄り添い続けながら、“災害時に取り残される地域をつくらない”ための広域連携のありかたを、さらに考えていくことが大切だと感じています。

7回目となる今回の訓練は、東日本大震災におけるボランティア活動の検証や課題を踏まえ「再び - 語

平成24年度災害ボランティアコーディネート研修会

第7回静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練

▶ 申込書・団体カードダウンロード

事前課題ワークシートのダウンロード

テレビ静岡FNNスーパーニュース

# 阪神淡路大震災から続いている！！

## 東日本大震災支援での足湯ボランティア





# 被災地NGO協働センターからスタッフを派遣！！

**緊急 被災地に届けよう。**  
東北地方太平洋沖地震支援基金への  
ご協力をお願いします。

## 日本財団 ROADプロジェクト

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震  
「今出来ること」という一人ひとりの小さな道が一緒になって大きな道へ  
どんな困難も乗り越える力 ~ Resilience will Overcome Any Disaster.

【募集】足巻ボランティア 第5～8陣 (2011.05.01～現在)

第5～8陣についてはそれぞれ定員に達したため申込みの締め切りました。  
お申し込みありがとうございました。  
次回募集は決まらず、こちらのROADプロジェクトブログでご案内します。

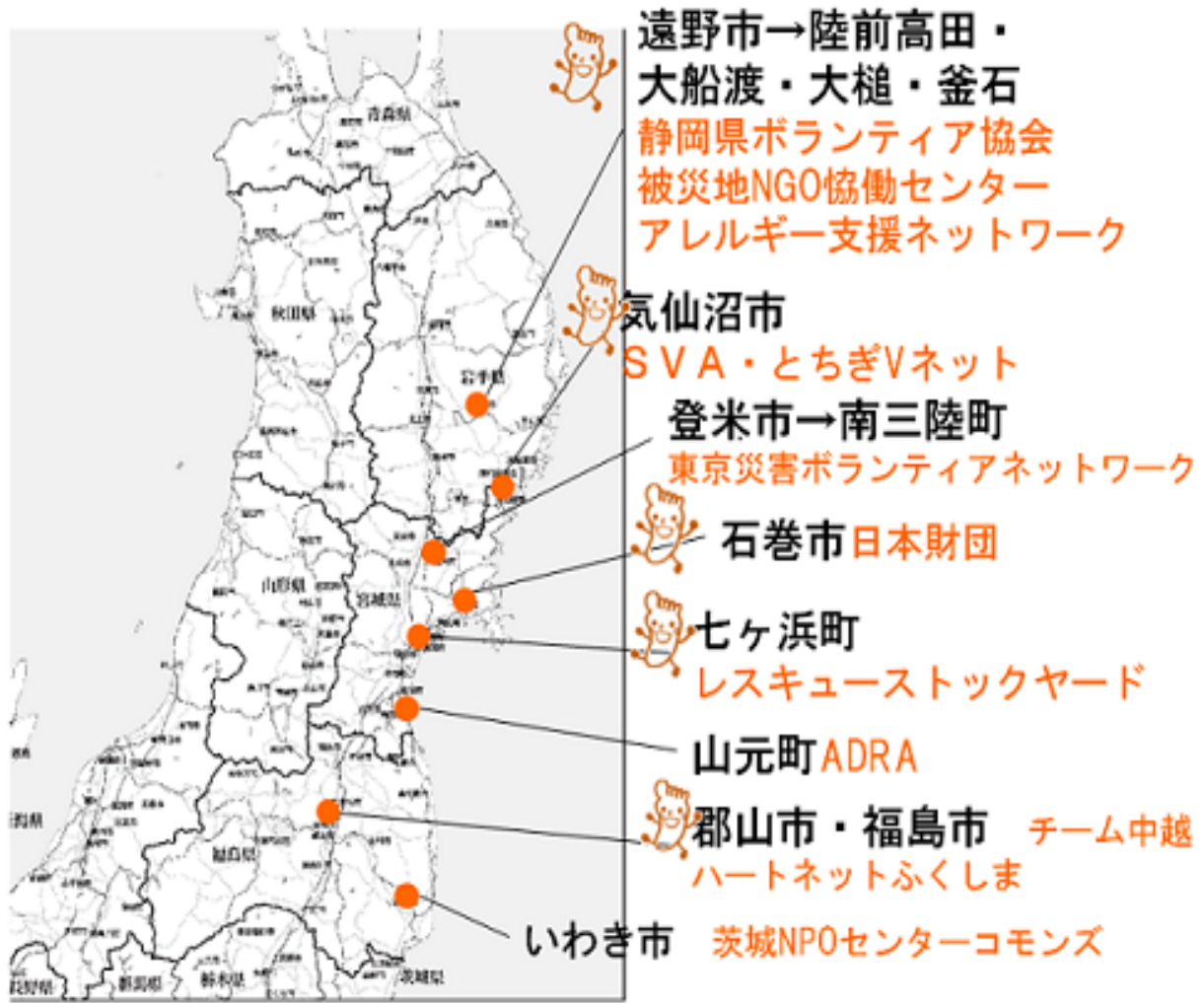
### ROADプロジェクト 足巻ボランティア【第5～8陣】 参加者募集中

2月26日から実施している「足巻ボランティア」が、今回、第5～8陣の募集を行います。  
お申し込みください。

第1陣の足巻ボランティアの様子  
**こちら**



被災地では物資や電氣、ガスがいたる経路やスタッフが使用できず、被災で困る被災者のために



**遠野市** → 陸前高田・大船渡・大槌・釜石  
静岡県ボランティア協会  
被災地NGO協働センター  
アレルギー支援ネットワーク

**気仙沼市**  
SVA・とちぎVネット

**登米市** → 南三陸町  
東京災害ボランティアネットワーク

**石巻市** 日本財団

**七ヶ浜町**  
レスキューストックヤード

**山元町** ADRA

**郡山市・福島市** チーム中越  
ハートネットふくしま

**いわき市** 茨城NPOセンター commons

阪神大震災から始まった「足湯」のボランティア活動が、東北の津波被災地に広がっている。

たらいに張った湯に足をつけてもらい、手をボランティアがさす。足が温まると心もほぐれるのだろう。ぽつりぽつりと胸のうちを明かし、なにげない一言から悩みに触れることもある。

そんな「つぶやき」は被災地で必要とされていることを読み取り、解決への道筋を探る手がかりになる。

復興支援のNPOが連携する「震災がつなぐ全国ネットワーク」と日本財団は、東京から3泊4日の日程で足湯ボランティアを送り込んでいく。これまで154回の活動で学生

や主婦、シルバー世代の男性ら延べ1615人が被災地に足を運んだ。

足湯をして、それで終わりというのではない。参加者らに「つぶやき」をカードに書き留めてもらい、その数は1万人分にのぼる。

仮設住宅に移ってから4400人分を家族、仕事、健康など25項目にわけて、東大被災地支援ネットワークがその内容を分析している。

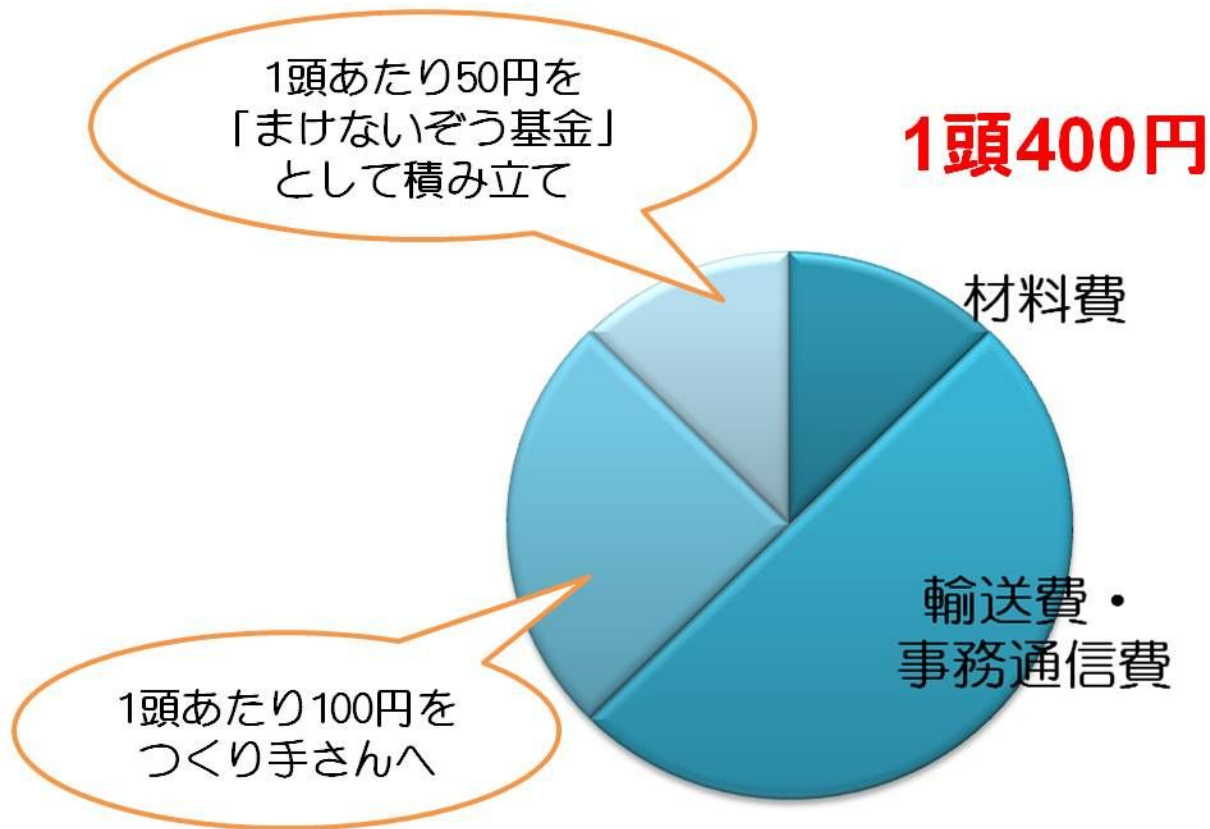
仮設で暮らす人たちの抱える課題を整理したもので、仮設団地ごとのデータも取り出せる。それを生かすのは地元の自治体や社会福祉協議会の役割だ。ボランティアから託されたバトンと受け止め、具体的な施策に結びつけてほしい。

〈野呂雅之〉

# KOBE発生きがい支援事業「まけないぞう」



# 生きがい・仕事づくり「まけないぞう」



# 東北に伝えた「まけないぞう」



## 神戸生まれの壁掛けタオル▶

阪神大震災後に神戸で生まれたゾウの形の壁掛けタオル「まけないぞう」＝写真＝の普及に取り組む被災地NGO協働センター

### 東日本大震災

## NGOの増島さん 被災者70人製作 1年にわたり紹介

「まけないぞう」は97年、神戸市の仮設住宅の被災者が作り始めた。1枚のタオルをゾウの顔の形になるように縫い、頭の部分にひもを付けて壁掛け用に仕上げる。被災者の生きがいやコミュニケーションづくりの手段、就労支援として活用されている。

（神戸市兵庫区）の増島智子さん（41）が、東日本大震災の被災地で1年にわたる活動を終えた。岩手県を中心に約70人の被災者が製作者となり、これまでに約3万個の「まけないぞう」が誕生した。増島さんは「神戸から東北へ、さらに支援の輪が広がって」と願っている。

増島さんは震災直後の昨年3月末から、岩手県遠野市の民家を借りて泊まり込み、大槌町や陸前高田市など岩手県内の避難所や仮設住宅で作り方を紹介した。ふさぎこんでいた被災者は作業に没頭することになり、不安や寂しさを忘れ、「まけないぞう」の愛らしい姿に心を癒やされたという。

「大船渡」などと製作した地域名も表示して包装した。今後も増島さんは月1回程度、被災地を訪れて作り方を紹介していくつもりだ。商品の購入希望や新品のタオルの寄付も募っている。問い合わせは「被災地NGO協働センター」（078・574・0701）へ。



「まけないぞう」の作り方を被災者に紹介する増島智子さん（中央）＝岩手県遠野市の仮設住宅集会所で（被災地NGO協働センター提供）

大槌町で12歳の孫を亡くした70代の女性は「ぞうさんがなかったら、私はどうなったかわからない」とつぶやいた。増島さんはこの言葉が忘れられず、「ぞうさんが大きな力を持っていると確認した瞬間」と振り返る。

### 大学生提案の味は？

明石産食材で創作料理  
 「鯛とタコの押しずし」「タコライスポール」「鯛バーグ」など明石産の食材を使ったアイデア料理5品の試食会が25日、明石市立保健センター調理室であった。アイデアを出した大学生や料理研究家ら約40人が試食し、意見を交換した。6月27日～7月3日



# 「まけないぞう」20万個

## 被災者連帯「細く長く」

阪神・淡路大震災後、被災者に仕事と生きがいを提供しようと被災地NGO協働センター（神戸市兵庫区）が始めた壁掛けタオル「まけないぞう」の販売が20万個を突破した。神戸で生まれた取り組みは2004年の新潟県中越地震や昨年の東日本大震災の被災地にも広がり、購入者はアジアやヨーロッパな世界に及ぶ。ソウの鼻のよちに「細く長い」支援が被災者を励ましていく。（木村信行）

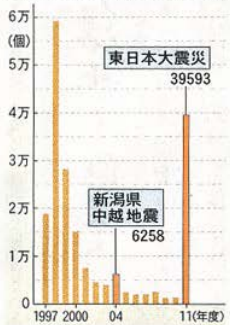
## 避難所、仮設で手縫い



避難所で「まけないぞう」作りに取り組む東北の女性ら（岩手県大槌町）。被災地NGO協働センター提供

まけないぞうは、生地の一部をソウの顔の形に加工した手ふき用のタオルで、同センターが1997年に発案した。2本のタオル運動」として全国に新品のタオルの提供を呼び掛け、各地の避難所や仮設住宅に郵送。子どもからお年寄りまで幅広い世代が手縫いで仕

まけないぞう販売数の推移



上げる。1個4000円で販売し、輸送費などを除いた1000円を製作者に支払う。残る3000円のうち50円を「まけないぞう基金」として、今後の活動資金に積み立てる仕組みだ。15年間の総売上高は8千万円を超え、2千万円が被災者に渡った計算になる。月平均2万〜6万円が製作者に支払われ、

## ぞうさん作りが心の支え

### 協働センターに生の声

被災地NGO協働センターは被災者の生の声がある。宮城県気仙沼市の女性

は「すべてを流されたのが、本当にありがたい仕事。はきみ一本から食していたき助かります」とつぶやいた。ほかに高齢者から「孫にアイスクリームを買ってあげられるようになった。昔、人形作った懐かしさで始めた。歴史も財産も失ったが、今はぞうさん作

りが心の支え。などの声が寄せられ、心のケアにも役立つという様子がかがえる。

またフランスの購者「まけないぞう」を作る、買うという素朴な行為を通じ、被災地の悲しみを思い、絆が生れるのですね」とメッセージを寄せた。被災地NGO協働センターの増島智子さん（41）は「まけないぞうは商品ではな、メッセージ。時間が過ぎるほど深まる被災者の孤立感を

売上げ、現在は岩手県大船渡市、宮城県南三陸町、福島県南相馬市などを21カ所、約100人、月3千〜4千個を作る。同センターの村井雅博代表は「被災地には生きがいも仕事も失い、途方に暮れている人が大勢いる。連帯の輪をもっと広げたい」と話す。

少しでも和らげたいと話す。問い合わせは同センター ☎078・574・0701

## 柳田の思想今こそ

没後50年 東京でフォーラム



「遠野物語」石井正巳・後、東京都

兵庫県福崎町出身の民

# 私の視点

Daniel Aldrich  
ダニエル・アルドリッチ

米パテュー大准教授(政治学)

しみず みか  
清水 美香

米東西センター客員研究員  
(公共政策)

東日本大震災への政府や大組織の対応は、総じて効率性を欠くなど組織上の構造的な問題が散見された。対照的に、想像力にあふれた、効率的な活動で対応したのは、アントレプレナー(起業家)精神にあふれるボランティアだった。非常時には意思決定も早く、小回りが利く小さな組織が有効だ。

被災から数週間後、商業用ヘリコプターの操縦士たちは道路や橋の広範囲な寸断で物資の配給が遅れていることを知った。そこで民間の「全国自家用ヘリコプター協議会(HCJ)」が寄付金を集めて燃料を確保、宮城県に滞在するヘリを使って食料や水などを避難所に運ぶ活動に乗りだし、6月までに40ト以上の物資を配った。

東京に住むユダヤ教会のビンヤミン・エダリー師は、被災者が日常生活のリズムを取り戻すことに助力したいと、焼き芋売りのトラック運転手に東京から仙台の避難所に向かうよう頼んだ。運転手は驚きながらも師の真剣さに押されて同意、12時間後には現地に着きスピーカーで呼びかけると何百人もが集まってきた。計400人を超す焼き芋が無料で配られ、人々はほおばりながら涙を流し、ようやく普通の生活らしいものを感じることができたと語った。

こうしたフィランソपी(企業などの社会貢献活動)を持続さ

## 慈善活動持続する仕組みを

被災者への支援

せるには新しい仕組みづくりが必要だが、民間セクターや市民社会がそれを実践しつつある。例えばネット通販「アマゾンジャパン」は、被災地の人々のニーズと全国各地の寄付者をつなげるプロジェクトを展開。個々の避難所がアマゾンに「ほしい物リスト」を送ると寄付者はアマゾンのウェブサイトからその品を購入し、それが被災地に直接届けられる仕組みだ。

NGO「ボランティアプラットフォーム」は、被災地の家族や子どもたちのニーズと彼らを支援したいと望むボランティアを結びつけるシステムを開発した。また、岩手県遠野市のNGO「遠野まごころネット」は、被災地各所へ車で約1時間という地の利を生かしてボランティアを募り、日用品や食料を全国から集めて被災地に届ける拠点の役割を果たしている。

被災地支援のこうした革新的アプローチは国境を超えて共有されるべきだろう。公共部門は、民間組織や市民社会と連携して社会資本を動員し、被災コミュニティの「回復力」「繋がる力」などを包含する「レジリエンス」(しなやかな活力)を引き出し、強化する持続可能な仕組みづくりに力を注ぐべきだ。こうした仕組みを通してこそ、社会アントレプレナーは難局にある地域共同体の自助共生を支援し続けることができる。